人間文化創成科学論叢　第14巻　2011年

古浄瑠璃における冒頭・結尾表現

井之浦　茉　里*

The opening and ending descriptions in Ko-joruri

INOURA Mari

abstract

The purpose of this paper is to reveal the types and characteristics of formula used in the opening and ending descriptions in Ko-joruri. In this paper, 50 Ko-joruri works were examined. As a result, 2 types of formula were found in the opening while 3 types of formula were found in the ending. There are no changes of the 2 types of formula found in the opening of each works. But the 3 types of formula found in the ending are changeable depending on the works. And, it is presumed that "ending description of the opening paragraph + opening description of the second paragraph" when put together is accountable as formula. Besides, in comparison with Kowaka-mai which has the influence of Ko-joruri, Kowaka-mai has more types of descriptions in the opening and ending than Ko-joruri. Accordingly, the opening and ending descriptions in Ko-joruri are intentionally narrowed down to few types of formula.

Keywords: Ko-joruri, Opening descriptions, Ending descriptions, Text, Fomula

１．はじめに

古浄瑠璃には定型的表現が多く、何作品かを概観するだけでも同一、もしくは類似の表現に遭遇する。香川（1951）は古浄瑠璃などの戯曲を「様式化の代表者であろう」とした上で、古浄瑠璃が「『さてもそのゝち』ではじまり『……感ぜぬものこそなかりけれ』で結ばれねば納まらぬ、さうした当世の民衆をそれは相手とした」と論じ、古浄瑠璃の冒頭、結尾が慣用的な表現、つまり決まり文句で構成されていることを指摘している。本稿では、古浄瑠璃の冒頭、結尾に現れる決まり文句の種類や役割を明らかにしたい。

２．先行研究

決まり文句の分析のために、本稿では山本（1973）の「開かれた決り文句」「閉じられた決り文句」の概念を用いることにしたい。山本（1973）は説経節の語りの構造研究の一環として決まり文句について分析している。説経節は仏教の経文や教義を語る「唱導」をもとにし、江戸初期に栄えた語り物芸能で、「説経浄瑠璃」と呼ばれるほど古浄瑠璃とは物語の内容的にも表現的にも共通、類似性が見られる。よって、山本（1973）を古浄瑠璃に援用することは可能だと考える。

山本（1973）は説経節の決まり文句として、「□この由聞こしめし」「□これをご覧じて」「あらいたはしや□」「こはなさけなの次第かな」などを挙げ、決まり文句を「開かれた決り文句」と「閉じられた決

キーワード：古浄瑠璃、冒頭表現、結尾表現、文章、決まり文句

＊平成21年度生　比較社会文化学専攻

り文句」の２つに分類している。「『□これをご覧じて』のように物語的環境によってさまざまに変化する部分（□の部分）を持っているものを『開かれた決り文句』と呼び、『流涕こがれてお泣きある』のようにそうでないものを『閉じられた決り文句』と呼んでいる」のである。そして、「開かれた決り文句は、その空白部に物語の場面的な要素に従って、登場人物名や地名を適当に挿入すれば、ほとんどどんな場面にも使用できて便利」だとして、「閉じられた決り文句も同様にそれが短い句でできており意味的に単純でもあるためにさまざまな物語的場面に適宜使用できる」としている。

その他、古浄瑠璃の頻出、慣用表現について分析したものには、香川 (1951)、村上 (2000)、濱田 (2005) がある。古浄瑠璃の一段目発端部の物語構造に着目した角田（1965）がある。物語の冒頭もしくは結尾表現についての研究には、糸井（1998)、神尾（1998)、柳田（1998)、染谷（2008）などがある。

３．使用するデータ

古浄瑠璃は凡そ六段構成であり[1]、物語全体の冒頭（一段目冒頭)、結尾（六段目結尾）と各段の冒頭（一～六段目冒頭)、結尾（一～六段目結尾）が存在する。本稿では各段の冒頭、結尾を対象とする。材料には『古浄瑠璃正本集』第１巻、２巻に所収されている計50作品[2]を使用し、各段の冒頭・結尾表現を抽出した。本稿で対象とした作品はほとんど六段構成だが、いくつかの作品では欠如している段があるため、抽出した総数は冒頭表現として計271段分、結尾表現として計266段分となった。なお、『古浄瑠璃正本集』は10巻まであり、本稿で扱う第１、２巻には古浄瑠璃の始まりといわれる「浄瑠璃十二段」から正保期までに刊行された作品が載っている。黒木（1981）は古浄瑠璃を創始期（中世)、発展期（寛永―承応)、全盛期（万治―寛文―天和）に分けているが、第１、２巻は黒木の分類では創始期から発展期に当たる。ただし創始期は現存している本が少ないため、今回資料としたのは主に発展期（刊行は寛永、正保期）のものである。黒木は発展期について「古浄瑠璃の大切なる原型は、既にこの期に於て出来上つて居るといつてよいと思ふ」と論じている。冒頭、結尾の決まり文句もこの期にはすでに出来上がっていると考え、この50作品を資料として選んだ。

４．冒頭の決まり文句

古浄瑠璃の冒頭は以下例１のようなものである。本稿では各段の始まりの部分を冒頭表現とし、その中で複数の作品に共通して使用されている表現を決まり文句とみなすことにした。

（例１）　さてもそのゝち、ひめ御せんは、夜もふけ人もしつまりて、ほりよりそとに出たまひ、
（６むらまつ　三段目冒頭）

今回対象とした計271段では「さてもそののち」で始まることが最も多く210回であった。「さてもそののち」は『角川古語大辞典』や香川（1951）でひとまとまりの表現とされていることから、「さても」「そののち」に分けずに「さてもそののち」で一つの表現と考えることにする。以下の表１は今回見られた冒頭表現である。

【表１　冒頭表現一覧】

さてもそののち	210回	そののち	54回
かくてそののち	2回	さるほどに	2回
さても	1回	さるあひだ	1回

「さてもそののち」に次いで多く使用されていたのは「そののち」(54回）であった。「さてもそののち」で全体の77%、「そののち」で全体の20％を占め、この２つの使用が際立って多いため、本稿では「さてもそののち」「そののち」を冒頭の決まり文句と考える。この２つの表現は山本（1973）における「閉じられた決り文句」に当たる。なお、一段目冒頭はつねに「さてもそののち」だったことから、物語全体の冒頭では「さてもそののち」が

使用されていることが分かった。また、今回使用した正本集は当時の刊行順に作品が載っているが、「そののち」が最初に現れたのは13番目「しんらんき」で、「しんらんき」に１例ある後は出現せず、「そののち」の使用が一気に増加するのは36番目「源氏のゆらひ」以降の作品からであった。よって各段の冒頭は、はじめは「さてもそののち」が占めており、「そののち」は後から使用されるようになった決まり文句だと考えられる。

５．結尾の決まり文句

古浄瑠璃の結尾に使用される決まり文句は、冒頭の「さてもそののち」「そののち」とは異なり、作品や段に応じて表現が変化することから、山本（1973）の「開かれた決り文句」に当たる。

（例２）　あるひは中将左中将、う大じんさ大じん、とうのへつとうさいとうとて、みなことへくくわんらんする、しやうこも今もまつ代も、ためしすくなき次第とて、かんせぬものこそなかりけり

（21よりまさ　六段目結尾）

古浄瑠璃の結尾の一例として例２を挙げた。「□せぬものこそなかりけり」の□部分には様々な表現が入り、「せぬものこそなかりけり」は固定的であることから、これを結尾の決まり文句のひな形と考える。今回のデータからは３種類の「開かれた決り文句」のひな形が見つかった。さらに例２下線部の「しやうこも今もまつ代も」や「ためしすくなき次第とて」も結尾によく見られる表現なので、これらも「開かれた決り文句」を構成する一部といえる。

【表２　結尾の決まり文句のひな形】

～せぬものこそなかりけり	108回
～とも中々申ばかりはなかりけり	91回
何にたとへん方もなし	41回

３種のひな形のうちのいずれかを使用している結尾は、今回分析した266段のうち約90％にのぼった。次に各ひな形の例を示す。

【～せぬものこそなかりけり】

（例３）　たうたいにいたるまて、つくしちくせんには、はらたのみやうし有、此すへ也ときこえける、家もさかへふつきのいゑときこへける、かのたねなをの心のうち、きせん上下をしなへて、かんせぬ人はなかりけり

（22はらた　六段目結尾）

（例４）あのやうなる、ありかたきひめを、いつくへやり申さんとて、長者のよめに、とらせたまひて、杢わかのみたいとそなはり、おととのていれいは、このてらに、しゆつけとけ給ふ、ためしすくなき事なりとて、おかまぬものこそなかりけり

（31むねわり　六段目結尾）

【～とも中々申ばかりはなかりけり】

（例５）　うちこを百たい百わうに、まもりたまはん御ちかいと、うけたまはりて候へは、きやうたいのはか共か、ゆくすへまふりてたひたまへと、ふかくねんしてたちたまふ、とにもかくにも、をやこの人のこゝろのうち、あわれなりともなかへに、申はかりはなかりけり

（５あくちの判官　三段目結尾）

（例６）　これまてなりと思ひて、にしにむかいて、心しつかに十ねんし、はら十文しにかきゝり、あしたのつゆときへにける、かの時成か心中、たのもしき共中へ、申斗はなかりけり

（30きよ水の御本ち　二段目結尾）

【何にたとへん方もなし】

（例７）　さかた此よし、うけたまはり、こんやはよもふけ候へは、明日たつね申へし、わかきみ様とそ申ける、とにもかくにも、御さうしの心の内、なにゝたとへんかたもなし　（７やしま　四段目結尾）

（例８）　こまをはやめてうつほとに、ねんらい五郎かすみなれし、はこねのてらにつき給ふ、きやうたいのうれしさ、たとへんかたもなかりけり　（16小袖そか　六段目結尾）

各用例の下線部を結尾の決まり文句と見なした。ひな形は基本的にひな形のままの表現で使用され、ひな形が変化する場合も、ひな形「～せぬもの」が例３「～せぬ人」に、ひな形「～とも中々」が例５「～とも中々に」に、ひな形「何にたとへんかたもなし」が例８「たとへんかたもなかりけり」になるといった言い回しの僅かな変化に留まっている。また、結尾は必ずひな形で終わっており、ひな形のあとに他の表現がきて文が終止するということはなかった。つまり、「開かれた決り文句」のうち、段ごとに変化する部分はひな形の前に置かれる。これを図にしたのが以下の図１である。

【図１　結尾の決まり文句の図化】

□	＋	（　　）せぬものこそなかりけり （　　）とも中々申ばかりはなかりけり 何にたとへん方もなし

この図のうち、（　　）部分には必ず何らかの表現が入る。□部分は段によってないこともあるし、何らかの表現が入るにしても段によって挿入される表現の長さに差がある。しかし段によって全く別の表現が入るわけではなく、（　　）や□部分に慣用的に使用される表現がある。

（　　）部分に入る表現

「～せぬものこそなかりけり」では、（　　）部分に「感ず」「ほめる」「拝む」など称賛、感心、尊敬などの感情を表す表現が入ることが多く、それらは登場人物の活躍や神仏の霊験に対して使用することが多い。「～とも中々申ばかりはなかりけり」の（　　）部分は、「あはれ」「いたはしし」などを用いて登場人物への憐憫や「たのもしき」などを用いて登場人物の行動への称賛を表していたが、中でも特に「あはれ」の使用が多かった。『日本国語大辞典』によると「あはれ」は「親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情を広く表わすが、近世以降は主として哀憐、悲哀の意に用いられる」とあり、「あはれとも中々申ばかりはなかりけり」という決まり文句は悲劇の描写がある段の結尾に使用される傾向があった。

□部分に入る表現

「～せぬものこそなかりけり」「～とも中々申ばかりはなかりけり」「何にたとへん方もなし」の３つに共通して多用されるものに、「とにもかくにも」があり、決まり文句のはじめに置かれる。また、「心のうち」「心中」も多く使われている。これは「～の心のうち、かんせぬものこそなかりけり」、「～の心のうち、何にたとへん方もなし」のように登場人物の心中を慮って称賛したり、憐れんだりすることが多いためである。そして、「～せぬものこそなかりけり」では「貴賤上下」「上下万民」や「上古（しやうこ）も今も末代も」との共起がよく見られる。これについては後述する。

物語全体の結尾である六段目結尾は、「～せぬものこそなかりけり」の使用が多く、六段目結尾計37段中30段がこの形になっていた。中でも「かんせぬものこそなかりけり」の使用は特に多く、六段目結尾37段のうち22段が「かんせぬものこそなかりけり」になっていた。さらに「かんせぬものこそなかりけり」には、「貴賤上下」「上下万民」や「上古も今も末代も」の共起がよく見られ、時代も身分も関係なく誰もが称賛するほどだということが表現される。古浄瑠璃は悲劇から大団円へというストーリー構造があり、物語の途中の、悲劇が起こる段の結

尾では「あはれとも中々申ばかりはなかりけり」などの決まり文句を使用して言いようのないほど憐れだと強い憐憫が表される。そのような強い「あはれ」な状態から物語のラストで大団円を迎えたことを表すには、ただ「かんせぬものこそなかりけり」とするだけでは足りず、「貴賤上下」などを用いて強い称賛を表す必要があったのではないかと考えられる。

また、各段の結尾の決まり文句は段全体や結尾直前の場面の総括をし、その段を締めくくる表現として使用されていた。塩谷（2005）は昔話の結末句や落語のオチのもつ重要な機能は話の終結を告げ知らせることだとしたうえで、落語はクライマックスで話が断ち切られることが多いため、オチには強力に物語を停止させる力が要求されると論じている。古浄瑠璃ではクライマックスで話が断ち切られることはないが、物語全体の結尾である六段目結尾以外の段では、物語の途中で段を終わらせなければならない。そのため、古浄瑠璃の結尾にはその段を終わらせる、言い換えれば、物語を段ごとに区切る力が求められ、決まり文句がこの役割を担っていると考えられる。

6．冒頭、結尾の決まり文句の段の途中での使用

冒頭、結尾の決まり文句もしくはそれに類似する表現は、冒頭、結尾以外の段の途中に使用されることがある。まず、段の途中における「さて」や「そののち」を含む語の使用は以下、表３のようになっていた。特に「さて」系は会話文、心内文の開始部に使用されることが多く、その場合は感動詞としてはたらく傾向にあった。

【表３　段の途中にみられる「さて」「そののち」を含む語】

さて	140回（71回）	さても	45回（27回）
これはさておき	66回（ 2回）	さてまた	33回（ 5回）
さては	46回（44回）	さてそののちに	23回（ 0回）
そののち	46回（ 9回）	さてそののち	9回（ 7回）

※上位８種の表現を載せてある。
※（　）内は、各数値のうち会話文、心内文に使用されている数。会話、心内の認定は筆者による。

冒頭の決まり文句「そののち」は段の途中に46回の使用があり、冒頭以外でも使用される表現となっていた。しかし「さてもそののち」については、段の途中に「さてそののちに」「さてそののち」という類似の表現はあったものの、「さてもそののち」自体の使用はなかった。

そして、結尾の決まり文句はいずれも段の途中での使用が確認された（以下、表４）。

【表４　段の途中に見られる結尾の決まり文句】

～せぬものこそなかりけり	30回
～とも中々申ばかりはなかりけり	6回
何にたとえん方もなし	8回

これら結尾の決まり文句は、話の終結を告げ知らせ、段全体や結尾直前の場面の総括をして段を締めくくる表現として結尾で使用されていたが、段の途中にある場合にも、ある場面が終わり次の場面に移る際に場面を締めくくる表現となっていた。また、「あしたのつゆになりける」の後に置かれ、登場人物が死亡する場面に使用されることもあった。

（例９）　あしたのつゆとなりけるを、おしまぬものこそなかりけれ、かゝりける所に……

人物の命の終わる部分に使用されるというのは、場面の終結部における使用という点で同様の使い方である。また、段の途中に結尾の決まり文句は使用される場合、「さて」「そののち」を含む語が後接することがある（以下、

例10～12)。

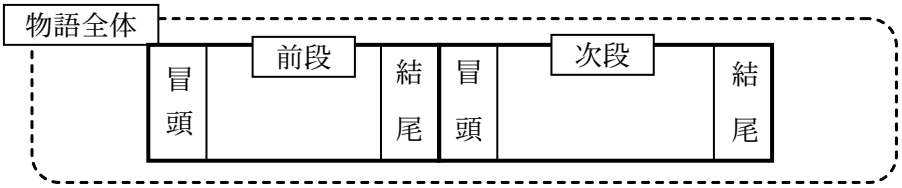
(例10)　ころもかわの、いせきにせかれて、しんたりしを、にくまぬものはなかりけり、そのゝちに……
(例11)　かのしけたゝのふるまひ、ほめぬものこそなかりけれ、是は扨おき、……
(例12)　とにもかくにもまにわうの。こゝろのうち。あはれともなかなか。申はかりはなかりけり
さても、……

段の途中で結尾の決まり文句に後接する「さて」「そののち」を含む語には、「さて」「さても」「さてそののち」「これはさておき」「そののち（に）」などがあった。つまり、段の途中の場面転換する箇所で、前場面の終わりに結尾の決まり文句が使用され、次場面のはじまりに「さて」「そののち」が使用されているのである。この結尾の決まり文句→冒頭の決まり文句（の類似表現）という順序は、段の途中だけでなく、冒頭、結尾部分にも当てはめることができる。これについては下記する。

7．隣接する決まり文句

ひとつの段の中において、冒頭と結尾ははじめと終わりという離れた位置に存在するが、古浄瑠璃は複数の段で構成されているため、前段の結尾と次段の冒頭は隣接することになる（図２)。よって段をまたいで結尾の決まり文句→冒頭の決まり文句というつながりがあることになる。

【図２　隣接する前段結尾と次段冒頭】



そこで「前段の結尾表現＋次段の冒頭表現」(以下、「結尾＋冒頭」）を、段をまたいで存在する大きなひとまとまりの決まり文句と見なしたい。この「結尾＋冒頭」というひとまとまりの決まり文句は、冒頭の決まり文句「さてもそののち」「そののち」と結尾の３つのひな形の決まり文句の組み合わせによって形成されることになる。このような段をまたいでの決まり文句は、段構成を有する古浄瑠璃ならではの表現であるといえよう。

8．幸若舞との比較

黒木（1981）は発展期の古浄瑠璃について、舞の詞やお伽草子など先行作品の改作が多いことを指摘し、特に史劇の「高館」「八島」「小袖曾我」などでは幸若舞の詞章をそのまま用いている箇所があると述べている。幸若舞は古浄瑠璃のような段構成がないので、幸若舞の冒頭は物語全体の冒頭を指すが、例えば「高館」という作品では、幸若舞の冒頭と古浄瑠璃の一段目冒頭は非常に酷似しており、幸若舞の表現を転用したことが分かる。

(例13)〈幸若舞「高館」(冒頭)〉
去程に、鎌倉殿、梶原を召され、「いかに梶原、承はれ。まことに、義経が謀反にをひて、疑ふ所なし。急ぎ義経を退治し、代を治めん」との御諚にて、

〈古浄瑠璃「高館」(一段目冒頭)〉
さてもそのゝち、よりともには、かぢはらめされ、いかにかぢはらうけたまはれ、よしつねむほんにおいて、

うたかふところさらになし、いそきよしつねをたいぢし、よをおさめんとの御ぢやうにて、

幸若舞の詞章として使用したのは、『新日本古典文学大系』の「舞の本」であるが、これは幸若舞の語り台本を読み物用に転用したもので、新大系本には寛永製版本（旧版）が所収されている。例13で注目すべきは、幸若舞「さるほどに」が古浄瑠璃では「さてもそののち」という古浄瑠璃の決まり文句に変わっていることである。この例のうち他の表現はほぼ幸若舞の詞章のまま転用しているため、「さるほどに」から「さてもそののち」への改変は意図的に行われたと思われる。次に、新大系「舞の本」の所収36作品[3]の冒頭を調べて表５にまとめた。幸若舞は段がないので物語全体のはじまりを冒頭としたが、「景清」のみ上下巻構成のため、上下巻の各冒頭を採った。

【表５　幸若舞の冒頭表現】

去程に	９回	爰（ここ）に	３回
さる間	６回	それ	２回
抑（そもそも）	６回	その他	11回

幸若舞では「さるほどに」「さる間」「そもそも」「それ」などの使用が見られ、幸若舞の冒頭表現は古浄瑠璃よりもバリエーションがあることが分かった。幸若舞では慣用的に使用されうる冒頭表現が複数あるのに対し、古浄瑠璃では各段の冒頭は「さてもそののち」「そののち」に限定されていることになる。次に、幸若舞の結尾も調査した。冒頭と同様に、物語全体の結尾を結尾表現とし、36作品の物語結尾（ただし「景清」は上下各巻の結尾）を採った。

【表６　幸若舞の結尾表現】

～せぬもの人こそなかりけり	11回	～たとへん方もなし	２回
～と聞えけり	11回	～とも中々申ばかりはなかりけり	１回
～に帰りけり	３回	その他	９回

幸若舞では、古浄瑠璃各段の結尾決まり文句である「～せぬものこそなかりけり」「～とも中々申ばかりはなかりけり」や決まり文句「何にたとへん方もなし」に類似の「～たとへん方もなし」が使用されていた。幸若舞の物語結尾では「心中」「貴賤上下」などが使用され、古浄瑠璃の段結尾と共通点が多い。例14は古浄瑠璃の段結尾に見られる決まり文句と大差なく、すでに幸若舞にあった結尾表現が古浄瑠璃の決まり文句になったことが分かる。

(例14)　幸若舞「八島」の結尾
衣川高館と申所に、新造に御所を立、柳の御所と申て、秋田、酒田、津軽、合浦、外の浦、日垠を構へて、いつきかしづき申。かの秀衡が心中をば、貴賤上下をしなべ、感ぜぬ人はなかりけり。

また、古浄瑠璃の段結尾は３つのひな形を用いた決まり文句で全体の約90％を占めていたが、幸若舞では結尾にバリエーションがあることや、古浄瑠璃の段結尾は否定形だったが、幸若舞では肯定形の結尾もよく使用されていることが分かる。古浄瑠璃は幸若舞など先行作の詞章を転用することはすでに述べたが、結尾に関しては、「～せぬものこそなかりけり」のような否定の表現は古浄瑠璃にも引き継がれていったのに対し、肯定形は採用されなかったことになる。

９．結論

古浄瑠璃の冒頭は山本（1973）における「閉じられた決り文句」、結尾は「開かれた決り文句」になっており、

冒頭の決まり文句としては「さてもそののち」「そののち」、結尾の決まり文句としては３種のひな形「～せぬものこそなかりけり」「～とも中々申ばかりはなかりけり」「何にたとへん方もなし」があった。そして「前段の結尾表現＋次段の冒頭表現」は冒頭の決まり文句と結尾の決まり文句を組み合わせによってできる大きなひとまとまりの決まり文句となっていた。

また、物語全体の冒頭である一段目冒頭ではつねに「さてもそののち」が使用され、物語全体の結尾である六段目結尾では「かんせぬものこそなかりけり」が多用される。よって、物語全体としての冒頭と結尾は「さてもそののち」と「かんせぬものこそなかりけり」で構成され、これが古浄瑠璃決まり文句の中でもより固定的に使用される表現として物語のはじまり・終わりという大枠を形作り、その他の段では今回見られたような数種の決まり文句が、ストーリーに応じて選択されていると考えられる。なお、物語全体の結尾で「かんせぬものこそなかりけり」が使用されるのは、物語のラストで大団円を迎える際、登場人物の活躍などに対して称賛を表現するためであった。

さらに幸若舞から詞章をそのまま転用する場合でも、段冒頭を古浄瑠璃の決まり文句「さてもそののち」に変更していたことから、古浄瑠璃の段冒頭は意図的に「さてもそののち」「そののち」に絞っていると考えられる。一方結尾は、幸若舞にあった肯定形の結尾は古浄瑠璃では見られず、古浄瑠璃結尾は否定形となっていることが特徴であった。段構成のある古浄瑠璃結尾では物語を段ごとに区切る力が必要とされ、結尾の決まり文句がその力を担っていると考えられるが、結尾の決まり文句に「～せぬものこそなかりけり」などの二重否定で強い肯定を表すことで表現を極立たせ注意をひくことにより区切る力が増加するため、ここが区切れだということがより明確に分かるようになっている。

決まり文句は使い古された陳腐な表現だと見なされることもあるが、古浄瑠璃が発展し栄えていくには、何度も使い回されることが重要だったのではないか。決まり文句の良さは再現性があることである。現在と違い、当時の人々にとって演奏を何度も聞くことは容易ではなかっただろう。しかし、古浄瑠璃の決まり文句はどの作品でも使用されるため、決まり文句を記憶し、それを日常生活で口ずさんだり、思い出したりすることは可能だっただろう。古浄瑠璃が民衆に受け入れられ約500作品もつくられ栄えたのには、耳になじんだ決まり文句が一役買っていると考えられる。特に今回資料とした創始期から発展期においては、古浄瑠璃という芸能が確立・定着していく上で、個々の作品のオリジナリティより、作品間に共通する表現の型のようなものが必要であり、その一つが決まり文句だったのではないかと思われる。

註

1　発展期の作品は凡そ六段構成となっている。黒木（1981）はこの時期の古浄瑠璃の物語構成ついて次のように述べている。「作品一篇の結構は、『高館』の五段を除いては、他はすべて六段組織であつて、第一段に於て全篇の事件の発端を示し、伏線を設け、第二段は此の跡を承けて事件の破綻を描き、全篇の大葛藤への第一歩を示す。それから第三段より第五段に亙つて葛藤の高潮、事件の紛糾となり、ここでは多くはその作の主要人物、又は少年少女等が運命に弄ばれ、悪人の毒手にかかつて悲惨な境遇に身を置くといふやうな仕組のものが多く、大抵は全篇の山がこの間に設けられてある。そして第六段に於てすべては解決される。而してこの解決は悲劇に終るものはなくて、神仏の霊験や忠臣義士の献身的の働きなどによつて、悪人が滅びて善人が栄えるといふ目出度い大団円で、ここに因果応報の理を為して居るのが常である」

2　使用した古浄瑠璃50作品は以下の通りである。なお、作品番号は正本集の掲載順に付けた。

1.浄瑠璃十二段／2.たかたち／3.はなや／4.ともなか／5.あくちの判官／6.むらまつ／7.やしま／8.こ大ぶ／9.いけとり夜うち／10.待賢門平氏合戦／11.阿彌陀本地／12.ちうしやう／13.しんらんき／14.石橋山七碕落／15.ふせや／16.小袖そか／17.きよしけ／18.あかし／19.こあつもり／20.すわのほんぢ兼家／21.よりまさ／22.はらた／23.石橋山七きおち／24.あみたのほんぢ／25.ゆみつき／26.小篠／27.とうだいき／28.かばの御ざうし／29.たむら／30.清水の御本地／31.むねわり／32.ふきあけひてひら入／33.にちれんき／34.義氏／35.感陽宮／36.源氏のゆらひ／37.箱根山合戦／38.きそ物かたり／39.あたかたかたち／40.田村／41.後醍醐天皇／42.ふきあげ／43.秀平三代記二日目／44.ゆいせき諍／45.曾我物語／46.石ばし山／47.きりかね／48.釼さんだん／49.ふじのまきかり／50.ぜんじそが

3　使用した幸若舞36作品は以下の通りである。

入鹿／大織冠／百合若大臣／信田／満仲／伊吹／夢合せ／馬揃／浜出／築島／硫黄が島／文学／木曾願書／敦盛／那須与一／景清／

伏見常葉／常葉問答／笛の巻／未来記／烏帽子折／腰越／堀川夜討／四国落／富樫／笈捜／八島／清重／高館／元服曾我／和田酒盛／小袖曾我／剣讃嘆／夜討曾我／十番切／新曲

参考文献

麻原美子・北原保雄編（1994）『新日本古典文学大系』第59巻　岩波書店
糸井通浩（1996）「小説の冒頭表現と視点　―シンポジウムでの発言を中心に」『表現研究』64
香川陽（1951）「古浄瑠璃に於ける頻出語句表」『国文学論叢』 3
黒木勘蔵（1981）『浄瑠璃史』飯塚書房
神尾暢子（1996）「物語冒頭と作品素材　―超越的素材と現実的素材―」『表現研究』64
小林由紀（1997）「「先行表現」をもたない指示語―「その」の文脈指示とは言いにくい諸用法をめぐって―」『国文学研究』121
塩谷透（2005）「昔話と落語」『千葉商大紀要』43－ 3
鈴木一彦・林巨樹編（1973）『品詞別日本文法講座　接続詞・感動詞』明治書院
染谷裕子（2008）「お伽草子の冒頭語―内容分類との関わり」『お伽草子の国語学研究』清文堂出版
角田一郎（1965）「古浄瑠璃の構造　――段目発端部について―」『日本文学』14－ 7
中村幸彦ほか編（1984）『角川古語大辞典』第２巻　角川書店
野村雅昭（1994）『落語の言語学』平凡社
濱田啓介（2005）「ある詞章論　古浄瑠璃慣用表現に関して」『近松研究所紀要』16
濱千代いづみ（2007）「『平家物語』における「さて」の用法」『国語国文学』26
村上學（2000）「同文重出に見る語り物表現の特性（問題提起として）　―古浄瑠璃「十二段草子」から幸若舞曲「満仲」に遡る―」『語り物文学の表現構造　軍記物語・幸若舞・古浄瑠璃を通じて』風間書房
柳田國男（1998）「昔話の発端と結び」『柳田國男全集』第13巻　筑摩書房
山本吉左右（1973）「説経節の語りと構造」荒木繁・山本吉左右編『説経節』平凡社
横山重校訂（1964）『古浄瑠璃正本集　増補版』第１巻、第２巻　角川書店